

解剖と正常像がわかる！ エコーの撮り方 完全マスター 第2版

編集：種村 正(公益財団法人 心臓血管研究所付属病院臨床検査室)

判型：AB判 336頁 定価(5,000円+税)

出版社：医学書院 2022年3月発行

機械化・AI化が進む昨今の検査室の中で、比較的多くの人員が割かれる傾向にあるのがエコー検査である。大学においても、対人検査であることや「技術が必要な検査」というイメージからか、「将来はエコー技師に！」という学生が例年一定数入学してくるようになってきている。しかし一方で、そのようなモチベーションにあふれた学生も含め、多くの学生からエコー検査の難しさを訴えられることがあることも事実であろう。私自身も学生時代、エコー検査は何を見ているのかよくわからず、国家試験勉強のときに苦勞した記憶がある。本書は、自分が学生だったときにこの本があればもう少し早くエコーが好きになれたかもしれない、と感じた1冊である。

学生がエコー検査を学ぶ際につまずく大きなポイントとしては、解剖学的知識の不足とエコー画像の解釈の難しさが挙げられるのではないだろうか。エコー検査では、音を身体に入射し、臓器から跳ね返ってきた音を利用して画像化する。いわば魚群探知のような検査であり、検査時には検査対象部位の解剖学的構造を把握していることが不可欠である。しかし多くの学生にとって、外部から見えない臓器の構造を把握することは難しく、また立体構造としての臓器と平面的に映し出される画像を頭の中で結びつけながら検査することは至難の業である。臓器の大きさや形にも個人差があり、また骨やガスの影響で良く見えないこともある等、数時間の学内実習で実技を身に付けるの

はなかなか難しい。自身の経験と反省点も踏まえ、実習前に解剖のおさらいをしたり、画像の見え方等の知識をインプットしておくことは、非常に重要だと感じている。

本書は、そのようなエコー検査初学者が、実際にエコーに触る前に知っておくべき情報がすべてまとまった1冊である。2014年に発行された『解剖と正常像がわかる！エコーの撮り方 完全マスター』をさらにパワーアップした第2版であり、エコー画像の実際の撮り方が詳細に解説されている。2015年には異常像をまとめた『疾患と異常像がわかる！エコーの撮り方 完全マスター』も発行されており、“エコーの基礎的な本”と言えば、このシリーズが思い浮かぶ方も多いのではないだろうか。このシリーズではエコー検査初学者を対象としており、プローブの持ち方から画質調整、正常像、シェーマ、解剖イラスト、さらには典型的な疾患の異常像とその特徴までが解説されている。エコー初学者が欲しいであろう情報がすべて網羅されており、この1冊があれば、エコー検査の基本的な手技は理解できるだろう。第2版ではさらに内容が充実し、図版も増量されている。初版も非常にわかりやすかったが、第2版では図版がよりきれいなものに変更されたり新たに追加されたりしたおかげで、より視覚的に理解しやすいものになっている。エコー検査の全体像が包括的に解説されており、至れり尽くせりである。実際のエコー画像も多数掲載されているため、理論

だけではなく実践的な知識も身につけることができる。本書のコンセプトは「見たらわかる。読めばもっとわかる」であるが、そのコンセプト通り、眺めているだけでもエコーが撮れそうな気になってくる。もちろん、実際に撮ってみると本に載っているようなきれいな画像はなかなか撮れず、悪戦苦闘することにはなるのだが。

エコー技師としてやっていくにはたくさんの知識と技術、経験が必要である。本書の執筆に

携わられた先生方も、最初から知識を持ちきれいな画像を撮っていたわけではないはず。エコー検査に興味を持つきっかけ、「自分でもできるんじゃないか」と思えるきっかけとして、ぜひエコー初学者の方にお勧めしたい1冊である。

(濱 智子：愛媛県立医療技術大学保健科学部
thama@epu.ac.jp)